

編集後記

日本国内では海外からのウイルス流入などをきっかけに麻しん（はしか）の患者数が急増しています。鹿児島市におきましても3月から4月にかけて32例の発生がありました。一つ一つの症例について新小田雄一鹿児島市保健所長を中心とした保健所の皆様による徹底した感染経路の追跡調査や感染対策のおかげで4月17日の発生を最後に発生の報告はありません。現時点では鹿児島市の麻しんは収束に向かっていると考えられていますが、全国的にはGWの人の移動により多くの地域で麻しんが発生している状況があるようです。そのため鹿児島市でも新たな麻しん発生に警戒が必要な状況に変わりはないようです。

「誌上ギャラリー」は横山桂先生から「初夏を迎える錦江湾」です。ブルーの空と海をバックに水族館と桜島フェリー、見慣れた鹿児島を代表する風景にほっこりしてしまいます。

「論説と話題」は、帆北修一先生より4月に鹿児島県医師会館で開催された「これからの医療政策（地域医療・精神科医療等）を考える会～厚生労働省医系技官からのメッセージ～」です。「医療政策の方向性と診療報酬」「精神医療に係る政策の動向と診療報酬改定」「令和8年度診療報酬改定について」の3つのテーマで講演の報告です。ご一読ください。

「学術」は呉建先生から「インフルエンザ罹患後に再燃したIgG4関連硬化性胆管炎の1例」です。IgG4関連疾患は血清IgG4高値に加え、著明なIgG4陽性形質細胞浸潤により種々の臓器腫大と線維化をきたす疾患です。閉塞性黄疸を契機に診断されたIgG4関連硬化性胆管炎に対してステロイド治療終了後にインフルエンザ罹患を契機に再燃をきたした症例の報告です。外来フォローの際にはステロイド終了後であっても、各種感染症への留意が必要であり、罹患した際には早期のフォローが必要のようです。

塩屋晋吾先生より「超音波検査が診断に寄与した限局性結節性過形成（FNH）の1例」

です。本症例のように、CTでFNHに矛盾しない所見を示しながらも、なお複数の鑑別すべき疾患が残る場合に、超音波検査によるBモードによる中心性瘢痕の評価と、カラードプラ法による血流動態の評価を組み合わせることが、診断を絞り込むうえで有用であるとのことでした。

鹿児島市外科医会春季例会の中から、米盛圭一先生より「腸閉塞を伴った成人特発性腸重積の1例」です。成人の腸重積は先進部に器質的疾患を伴うことが多く、特発性は稀とされています。治療方針は、腫瘍の有無や重積の局在によって異なります。治療方針は症例ごとに大きく変わる可能性があり、慎重な判断が求められるようです。

平瀬雄規先生より「髄膜腫肝転移に対して肝部分切除を施行した1例」、飯尾俊也先生より「消化管穿孔に対する人工肛門造設術後管理に難渋した慢性期脊髄損傷患者の1例」、高取寛之先生より「BMI 44の高度肥満男性のS状結腸憩室穿通に対する手術治療の経験」をご寄稿いただきました。ご一読ください。

「リレー随筆」は佐々木香奈先生より「3年間沖縄で修行を積んで」です。自ら厳しい環境に飛び込み、苦しみもがきながらも成長していく展開は、まるで医療系のテレビドラマのヒロインのように感じられます。同期の仲間であって、一緒に成長していった関係性、素敵です。沖縄での修行が、人生の中で最もチャレンジした3年間だったという言葉が全てを物語っています。今後は奄美大島、そして鹿児島で大いに羽ばたいていってくださいね。

J2再々復帰を目指す鹿児島ユナイテッドFCはJ2・J3百年構想地域リーグにおいて二位となりました。村主新監督のもとチームとして日々成長を続けていると感じます。今年から世界基準に合わせて8月からスタートするJ3リーグでの悲願の優勝⇒J2昇格を今年こそは実現してほしいと願っています。

（編集委員 今村 直人）